



「やりたくない」の向こう側

子どもたちは本来、やりたがりで見せたがり。ただそれは、まだまだ身近な人たちの安心感の中で、時に一緒にパフォーマンスなどすることで、それが周囲に共感されていることを実感する。

そして来月、それを親子で楽しむ「中の日」がやって来る。何をやってもよいというこの日をどのように迎えようかと、4、5歳児たちそれぞれのチームが、やんややんやとにぎやかになってきたことは、毎日の日誌（クラスのブログ）でご覧の通り。

「これ、やりたい」「それ、やりたくない」と喧々諤々の毎日なのだが、それは、こういった活動に限ったものでなく、日常のあちこちで巻き起こっているのが子どもの世界。

そこを拾った、こんな日誌を読んだ。

ある日の4歳児。造形遊びをしたいという声に応えて、絵の具遊びを提案した保育者。「やりたい」という多く



の声にまぎれて、「やりたくない…」も聞こえてくる。そこですかさず、「今日は、タンポやローラー、歯ブラシを用意したよ!」と言って大きな模造紙と様々な道具も紹介すると、表情が一変。

すると「ローラーって太く描けるよ。」「タンポに二色を混ぜると、マーブル模様になる!」「歯ブラシで擦ると、面白い模様が出てくる!」「色んな道具があると面白いね。」「と夢中になっていく。終いには、手のひらに絵の具をつける」と、「指を使うとタンポみたいに描けるね。」「これはもう手も道具だ!」「本当だ!手もローラーと同じだ!」という物言いに思わず頬を緩める保育者。

そして、いつもとはひと味違ったその出来栄に、「先生、これはこのまま終わりにしたらもったいないよ。」「うん、何かに使えるくらい良くできている。」と満足げな子どもたち言葉で、日誌は結ばれていた。（1月12日「手も道具」より）

「やりたくない」には様々な理由がある。「見通しが持てなくて不安」（未経験）、「一

度失敗して自信ない」（未熟）、「つまらない」（簡単で物足りない）、「気分が乗らない」（情緒的不安）などなど。

まだ生まれて数年の初めてだらけの者たちに、「じゃあ、やらなくていいよ。」というのでは、いつまでたっても新しい感動とは出会えない。すると、この世の中を好きになっていくことができない。

かといって、無理強いや我慢、大人に気を使わせて「お付き合ひ」をさせてしまふのもいけない。次なる新たな挑戦心を、どんどん奪ってしまうから。

だから「やりたくない」に、どんな環境や言葉を用意しておくのかという見通しや準備が、大事になってくる。ただ集団には、それぞれに様々な理由が混在しているのだから、それは言うほど簡単なことでもないのではあるが。

「子どもが新しい価値世界（物事）に出会う瞬間を、私たちはどう演出していけばよいのだろうか。」

とどのつまり、これを追求していくことが保育・教育で、これこそが、大人が果たすべき重



という憧れにも近い思い。そして、そこへも寄り添うべきなのではと、みんなで話し合ったことを思い出す。

●編集 幼保連携型認定こども園せいび
●発行人 折井 誠司
●印刷所 折井 誠司
●発行所 社会福祉法人 誠美福祉会
〒192-0364 東京都八王子市南大沢5-12
電話 042-675-1155
ファックス 042-677-5643
E-mail seibi@kodomoakyō.jp
http://kodomoakyō.jp

園長 折井 誠司